



# 鈴木康広 雪の消息 | 残像の庭

# Yasuniro Suzuki

# notes from the snow/ after the garden

**会期** 2019年8月17日(土)～9月16日(月・祝) 10:00～19:00(最終入場18:30)  
※無料エリア(SCARTSモールA・B・C)のみ、2019年8月11日(日・祝)～9月16日(月・祝)

**会場** SCARTSコート、SCATRSスタジオ、SCARTSモールA・B・C  
**入場料** 一般500円(400円)、高・大学生250円(200円)、65歳以上400円(320円)、中学生以下無料

※( )内は、団体・リピーター価格

※プレオープン期間は無料

**主催** 札幌文化芸術交流センター SCARTS(札幌市芸術文化財団)、北海道新聞社  
**助成** 芸術文化振興基金

**後援** 札幌市、札幌市教育委員会

**協力** アイティーエル株式会社、株式会社ゴトー工芸、株式会社セイコープラスチック、  
東京大学生産技術研究所試作工場、  
東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野、株式会社メディアタージ

**キュレーター** 樋泉綾子(札幌文化芸術交流センター SCARTS)  
**テクニカルディレクター** 岩田拓朗(札幌文化芸術交流センター SCARTS)  
**コーディネーター** 齋藤雅之、矢倉あゆみ(いずれも札幌文化芸術交流センター SCARTS)  
**テクニカルスタッフ** 神坂知春、福津圭佑(いずれも札幌文化芸術交流センター SCARTS)

夏に雪を思い出す。自然からの知らせを受け取る

身近な風景や自然現象など、普段何気なく見過ごしてしまうものごとを新鮮なまなざしで見つめ、世界の新しい捉え方を提示しつづけてきた作家、鈴木康広の個展を開催しました。活動の初期から「水」への関心を深め制作を行ってきた鈴木は、今回、2006年にはじめて札幌を訪れた際に得た「雪」の印象を手掛かりに、《水の人》や《記憶の鍵／スコープ》など、水や霜が時間をかけて変化する様子を捉えた作品を制作し、発表しました。代表作《まばたきの葉》や、本展のためにスケールアップした《りんごの天体観測》などを含む全25点を展示し、作品が示さざりげない現象に目を凝らし、耳を澄ますことを通して、普段気づかずにいる自然からの知らせを受け取り、過去や遠く離れた場所へと思いをはせられるような展覧会となりました。

## 鈴木康広

1979年静岡県生まれ。すでにあるものや見慣れた現象に新鮮な切り口を与える作品によって、もの見方や世界の捉え方を問いかける活動を続けている。2014年に水戸芸術館、2017年箱根彫刻の森美術館にて個展を開催。第1回ロンドン・デザイン・ビエンナーレ2016日本代表。代表作に《まばたきの葉》、《ファスナーの船》、《空気の人》など。2020年より十和田市現代美術館にて屋外彫刻作品《はじまりの果実》を展覧。2014毎日デザイン賞受賞。武蔵野美術大学准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員。



《氷の人》2019年 撮影:今井智己



《記憶の鍵／スコップ》2019年 撮影:今井智己

《りんごの天体観測》2006/2019年 撮影:今井智己

## 【関連イベント】

### 鈴木康広 アーティストトーク

日時 ①2019年8月17日(土) 16:00~17:00  
②2019年9月16日(月・祝) 14:00~15:00  
会場 札幌市図書・情報館1階  
入場料 無料  
出演 鈴木康広(アーティスト)  
聞き手 樋泉綾子(札幌文化芸術交流センター SCARTS キュレーター)

「鈴木康広 雪の消息|残像の庭」の会期のはじめと終わりにあわせ、作家本人によるトークイベントを開催しました。これまでの作品や、本展にあわせて新たに制作した作品について、さまざまなエピソードを交えながらお話ししました。

### キュレーターによるギャラリートーク

日時 2019年9月1日(日) 11:00~11:40  
会場 SCARTSコート、SCATRSスタジオ、SCARTSモールA・B・C  
参加費 無料  
案内 樋泉綾子(札幌文化芸術交流センター SCARTS キュレーター)

担当キュレーターが参加者と共に展示室をめぐりながら作品の見どころや制作風景についてお話ししました。

### SCARTSアートコミュニケーターによる関連プログラム

- ①「みんなでつなぐパラパラまんが」  
会期 2019年8月25日(日)~9月16日(月・祝) 10:00~19:00  
会場 SCARTSモールC
- ②「べっこうあめの人と記憶の旅へ」  
日時 2019年9月14日(土) 10:30~12:00  
会場 SCARTSコート、SCARTSモールA・B、小練習室3
- ③「時の流れ 雫の時間 ~水時計作りワークショップ~」  
日時 2019年9月14日(土) 13:30~16:00  
会場 SCARTSコート、SCARTSモールA・B、小練習室3

作品をより深く楽しんでもらうことを目的に、展示されている鈴木康広作品から見つけた「時間」や「水」などのテーマをもとにして、アートコミュニケーターがワークショッププログラムを企画・実施しました。



鈴木康広「まばたきの葉」2003年 撮影：今井智己

# 鈴木康広 アーティストトーク①

# Yasuhiro Suzuki

# Artist talk 1

**日時** 2019年8月17日(土) 16:00~17:00  
**会場** 札幌市図書・情報館1階サロン  
**出演** 鈴木康広(アーティスト)  
**聞き手** 樋泉綾子(札幌文化芸術交流センター SCARTS キュレーター)

「消息」は変化や揺らぎ、  
 「残像」は遅れることや思い出すこと

**樋泉** 皆様、お待たせいたしました。これより本日開幕した「鈴木康広 雪の消息|残像の庭」展のアーティストトークを始めます。本日司会進行を務めさせていただきます札幌文化芸術交流センター SCARTSの樋泉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

**鈴木** 皆さんこんにちは、鈴木康広です。お集まりいただきありがとうございます。

**樋泉** 本展は、鈴木さんにとって北海道では初の展覧会となります。鈴木さんは活動の初期から水をテーマに制作されることが多かったのですが、2006年にはじめて札幌にいらした際の雪の印象を手掛かりに、今回は水点下の水の形というところまで関心を広げて、多くの新作を制作してくださいました。今日のトークでは、新作のお話を中心にお伺いしていきたいと思います。

**樋泉** 今回の展覧会のためのリサーチとして、冬に一度札幌にお越しにいただいているのですが、雪の印象や記憶に残っていることはありますか？

**鈴木** 僕は、18歳まで静岡県の浜松市にいたのですが、浜松ではほとんど雪が降らないんです。皆さんは想像できないかもしれませんが、雪が降ると、みんな口を開けて走るんです。憧れの雪を食べたいと思うんですね。みんな一斉に口をばくばくしながら雪を追いかける。僕らにとって、雪とはそういうものだったんです。幼稚園の頃に一度だけ雪が積もったことがあって、もう本当にびっくりでした。幼い頃だったのに、強く印象に残っています。写真を撮ったわけでもないのに、今でもすべり台の付近に雪がちょっとだけ積もって、しばらくそこにあった、ということ覚えてるんです。

2006年には、樋泉さんも関わっていた「あけぼの美術企画」という、廃校になった小学校で活動するグループのトークイベントに呼んでいただいて、はじめて札幌に来ました。札幌で一番忘れられないのは、トークが終わった後に「あけぼの美術企画」の猪熊さんと樋泉さんに誘われて行ったモエレ沼公園でのことです。スキーウェアを着せられて、モエレ山からそり滑りをしようと言われたんです。滑ってみたら、大変で止まらないんですよ。止めたくても止まらなくて、足でぎゅっとブレーキをかけると、ブレーキで舞い上がった雪が顔にかかり、痛くて視界が真っ白で、わずかに数秒の間なのですが、ものすごく長く感じて、泣いたんです(笑)。泣いてるのか笑ってるのかよくわからない状態で隣を見ると、樋泉さんと猪熊さんもそんな感じでした。

**樋泉** 泣きながら笑ってましたね。  
**鈴木** とにかく、ものすごく強烈なその数秒間のことを忘れられなくて、そのことをたびたび思い出していらしたら10年以上たって、今回、こういうご縁があって、札幌でこんな大きな展覧会を開くことになりました。そういった僕自身の実体験から制作に取りかかる



鈴木康広

鈴木康広 雪の消息|残像の庭

あたらしい表現の可能性をひらく

ことができました。

**樋泉** ありがとうございます。鈴木さんはすでに全国のさまざまな場所で展覧会を開催されていますので、札幌での特色を考えたときに、開催時期は夏ですが、その時は見えない雪のことや過去のことの思いを馳せるような展覧会にできたらと思い、お願いしました。鈴木さんには「雪の消息|残像の庭」という印象的なタイトルをつけていただきましたので、このタイトルのコンセプトについてもお話しいただけますか。

**鈴木** 僕は文章を書くのがあまり得意ではなくて、感じたり考えたりしたことが「いちばん最後に言葉になる」という感じがあるんです。なので、最初にタイトルをつけなさいと言われると、本当に困ってしまいます。今回も「雪の消息|残像の庭」というふたつのキーワードを自分の中に持ちながら制作をしましたが、本当は、展覧会という形式ではなくて、普段の制作の中に、ヒントというか、意味が生まれるのかな、とも思っています。

この写真は、冬のリサーチのときのものなのですが、今回も大小ふたつのサイズのものを展示させていただいている《空気の人》です(写真1-1)。最近、僕の分身みたいにさまざまな場所に連れて行きます。モバイルタイプというか、自分で空気を入れすぎると酸欠状態で貧血になってしまうので、ちょうどいいサイズですね。

これは、後ろ向きに歩いて自分の足跡を見ると、「未来の足跡」に見える、ということを思いついて撮った写真です(写真1-2)。「未来」というのは、前に向かって歩いているときに何となく感じるものだと思います。これから歩いて向かう先が未来だと感じるからだと思いますが、「現在・過去・未来」とか、「春・夏・秋・冬」とか、そういう「言葉」によって「ある」と信じているものは実はとても曖昧で、言葉を身につけてしまうとそのようにしか見えなくなる、ということがあるように僕は思っているんです。そういうことを見破っていくきっかけを制作の中でつくっているように思います。

この写真はちょっと気に入っています(写真1-3)。視察のときは何人かで行動したのですが、だいたい僕だけ遅れてついていくんです。なぜかという、道の途中で写真を撮ってしまうからなんですね。写真を撮ると、行動が予定よりも遅れをとってしまうわけです。古



写真1-1 モエレ沼公園で浮かべた《空気の人》

いかもしれないですが、テレビゲームの『マリオカート』では、自分が最高記録で走ったときのアバターと競争できるんです。過去の自分の行動と、今の自分がずれたときに、はじめて未来とか過去を考えるわけです。

**樋泉** 鈴木さんと雪のまちの中を歩いていると、なかなか目的地にたどり着かないんですね。鈴木さんはすぐ面白いもの、私たちにとっては日常生活の中に埋没しているものを見つけて、ふと気がつくといなくなっていて、いろんなところを写真に撮っていらっしやるんです。「ああ、こういう風にものをみていらっしやるんだな」と、身をもってわかった経験でした。



写真1-2 未来の足跡 撮影:鈴木康広



写真1-3 雪に残った跡 撮影:鈴木康広

**鈴木** 進んで行くみんなを見て、もしも何もしなければ、この時間であんなに遠くまで行けるんだな、と思いました。この写真は、車に踏まれずに残った雪に、よく見るとミッキーマウスやキャンディーにも見える何かがブツブツとあって、「これは何だろう」と思ったんです。ちょっとかわいらしいですね。「不思議だな」と思って上を見てみたくてですね。そうすると、つららがあって、そこからぼたぼた落ちた雫がこの跡をつけていたんです。「あ、あいつの仕業なんだ」と(写真1-4)。僕は普段足もとを見る事が多くて、それで猫背になったんですけど、足もとを見ることによって、上を見ることができるといふ意外な関係性があって。いきなりつらは見えなくて、足もとに不思議な痕跡があって、視点が移って行って「あ！」となる。「これは何だろう、見たことがないパターンだな」という不思議な状況をまずは察知することで、普段見えていない場所を見ることが出来ます。

タイトルについては、例えば冬の雪かきなんかは、僕が東京でほんの少しやるだけでも腰が痛くなったり、



写真1-4 つららの仕業 撮影:鈴木康広

大変なことですが、夏にはすっかり忘れてしまう。忘れるから、また冬が来ても許せる、ということもあるのかなと思いました。同じ場所なのに、雪のある、なしでこんなに別世界になることもすごく面白い。それで、夏に季節外れの「雪」というタイトルもいいなと思い、「雪」という言葉にチャレンジしました。

「消息」については、僕がずっと気になっている言葉なんですけど、「死ぬ」と「生きる」とか、「消える」と「現れる」という相反する意味を持った言葉がひとつになった状態なんです。「消息」という言葉で示そうとしている、変化だったり、揺らぎだったり、「何とも言えない状態」みたいなところに着目したいと思ってつけました。

あとは、「残像」ですね。アニメーションなどは残像の仕組みで成立しているのですが、ちょっと前の世界が網膜に焼き付いて残っているということです。自分の体の中にも「過去のもの」が少し残っている。ですから、映像に対してだけではなくて、あらゆることに対して「残像」という言葉を使っています。先ほどの「遅れ」だったり、「思い出す」ということもそうですし、手紙の返事もそうですね。最近だと、メールを送ると「即レス」みたいな状況も多いですね。僕は「即レス」はどうなんだろうなと思っていて。遅れる、ということは、その間に膨大な意味を含んでいます。例えば「返事が来ない」ということがものすごく大きな返事だったり。

樋泉さんと2006年にお会いして、今は2019年ですが、これは人類の歴史の規模で考えたら「即レス」なのかもしれません。でも、僕にとっては十何年という時間が入っている。人類は、そういう時間の解釈というものを、古代から現代まで、さまざまなかたちで思考し、語り尽くしてきたと思うんです。それを現代を生きる感覚の中で、実際に体験として、自分なりに捉え直すことができたらいいなと思っています。これまで「残像」という言葉が僕にヒントを与え続けてくれたので、今回、はじめて展覧会のタイトルにつけてみました。

#### 《氷の人》に込められた「時間」の考え方

**樋泉** 今のお話にもあったように、「時間」というのはこの展覧会全体に通底するテーマだと思います。「消

息」の、消えたり息を吹き返したりする変化や揺らぎということ、「残像」の、遅れてやってくる、過去のことを今に見る、という現象は、「時間」の体験だと思えます。今回の新作《氷の人》もやはり時間に関する作品だと思いますので、この作品の話をお聞きできればと思います。

**鈴木** 他者と時間を共有するために「時計」というものが、近代以降の社会には特に意味を持ちましたが、僕は美大に行くまでは、自分の中で「時間=時計」になっていたことに気づいて本当にびっくりしたんですね。それが当たり前のわけです。大学生になると、もう一度幼稚園児になるみたいなところがありますね。ある種、「遊び」の時間です。大学では「遊び」の中で学ぶということがもう一度学問として始まると思うんです。そういう中で、時間というのは感覚的、心理的なものでもあるということによりやく気づきました。

あと、僕には「将来の居場所がない」という不安があったんです。もともと勉強に挫折して美大に方向転換して救われたのですが、結局、美大の外に出ると自分がやりたいことではなくて、自分にふさわしい道は何かとか、答えの出ない問題に直面することになる。なので僕は「未来」という言葉が本当に気持ちが悪くて、大嫌いだったんですね。それを象徴する作品が、今回も出品している《現在／過去》です(写真1-5)。これは、「科目印」と言われているハンコなんですけど、一般的なハンコは「現在」と押そうと思ったら「現在」と押されるという機能しか与えられていないですよ。現実の世界には「現在」という時間はないということを体感的に示すことができたわけですよ。それは同時に「未来」という概念も疑うようなものだとも後から気づきました。でも、今の僕は人間が「現在」という概念を思いついたことに、すごくほっとするんです。ユートピアみたいなもので、「過去」がある以上は「現在」なんてないわけですよ。ないけれども、せめて「今」という間くらいはあっていいでしょう、という人間世界の提案だと思おうのです。この作品を思いついたことが「時間」というテーマとの出会いでした。2002年の作品なので、17年間ずっと考えています。そこから今回の出品作の《まばたきの葉》が生まれたり、自分の中に起こるいろんな現象をもとに、時間に向き合っていました。《氷の人》にたどり着くには、いろいろな作品制作の



写真1-5 《現在／過去》2002年

流れがあって、ようやく「自然現象の中の時間」をどう見るかというところに来ました。でも、まずは「水」という自分がつくったものではないものに人の形を与えるという、ものすごく初歩的なことなんです。これは現代アートだとあまりやらなくなっていることで、人の形にするという方法は原始的なわけです。でも、それをもう一度自分なりにやりたいなと思ったのが《氷の人》で、僕の中で最新の試みです。何よりもポイントなのは、とにかく現代に生きてると、何をやっても時間をもったいない、忙しい。最近、僕自身もすごく忙しさを感じてしまうんですが、まちを歩いていても目的や行き先が決まっているわけです。そういう時間感覚で生きざるを得ない都市の中で、どういう風にものを見たらいいのかな、ということですね。そこが《氷の人》のベースにあります。まず、《氷の人》が一番大きいもので溶けるのに3時間くらいかかります。

**樋泉** 昨日は3時間半かかっていました。

**鈴木** 普通見ていられないですよ。そういう感覚を自分の中で確認するということなんです。《氷の人》が溶ける様子を意識しながら、ごはんの支度をしたり、買い物に行ったり、帰ってきて、「まだいたのね」とか「あ、ちゃんと立ってたね」とか、みんなが家の中に《氷の人》を生けたとしたら……すでに《氷の人》の存在を感じられてきませんか？

**樋泉** はい、感じます。気になっています(笑)。

**鈴木** それは自分の子どもや親、金魚や犬のような身近な存在と同じように、《氷の人》のことを思うことを通して、時間を感じるということだと思おうんです。



写真1-6 《自然を測るメトロノーム》2017年 撮影：木奥恵三

この作品は、箱根の彫刻の森美術館で個展をするときに思いついたアイデアをかたちにしたもので、今回も出品しています。《自然を測るメトロノーム》と言います(写真1-6)。一見、普通のメトロノームに見えるんですけど、針が往復する時間を1秒から1万年までセッティングできるという壮大なものなんです。例えば、1分だとこのくらいの速度(ゆっくり指を動かす)で往復します。1分は見ていて心地いい感覚です。1時間ですと、動いているのか電源が切れているのかが正直わからなくて、顔を固定する道具をつくらばわかる、くらいの感じですね。そのくらい自分の目が動いているということです。例えば、彫刻作品を見たときに、彫刻が動いたとは思わないですよ。でも、実は動いて見えてるんです。それは見ている方が動いているからです。自分も年を重ねるとか、そういう変化に気づいてきていて、そういう対象側と自分側の変化のようなことに興味があるんです。これは、石で彫られた彫刻とどう向き合っているかということが正直わからなかったのも、「彫刻」という概念やその素材と向き合うためにつくったものです。これをつくったら、すごくしっくりきたんです。人が石で彫るということには「長く見てもらいたい」というものす

ごく強い意志や「何万年もそこに残る」という責任のようなものを感じます。氷でつくれば、数時間、数分で溶けてしまいます。発泡スチロールのように脆い素材でつくったほうが、ここにあるうちに見られてよかったね、となるのかも知れませんが、石の彫刻はいつでもあるからしばらく行かなくていいと安心させてくれる、ということもあるかも知れません。《氷の人》という作品を制作したことによって、彫刻するうえでの素材との向き合い方を考えることができたんです。なので、作品そのものというより、自分がいろいろなものと向き合うために必要な「道具」をつくっている、というのがこの作品制作なのかなと思ったりもします。

**樋泉** 時間の話で印象的だったことがあるんですが、鈴木さんの研究室にお邪魔したときに、文字盤の読めない変わった時計が壁にかかっている、そのことを言うと、時計は嫌いだとおっしゃっていました。ああ、なるほどなと思いました。鈴木さんが時間に捉われずにその時々ことに集中して向き合っている様子を目にしてきたのですが、その時計嫌いのエピソードを聞いて納得したんです。

**鈴木** 耳が痛いといいますが、設営も本当に時間がかかりましたね。果てしなく時間がかかる仕事なので、締め切りが嫌いなんです。でも締め切りのおかげでぎゅっと圧縮されて、何年かかってもできないことが達成されるということがあるんです。それがなかったら、夏休みの宿題みたいに、いつまでも後でやろう、後でやろうと思ってしまう。これは、みんなが共有している難問だと思います。

時計の話ですが、武蔵野美術大学のゼミの学生が仕事場に来たときに「先生の研究室に時計がないことに気づきました」と、卒業式の謝恩会のときにもりました。「ああ、時計をもらっちゃった……使わないのに……」と思いました。そんなことは言えないじゃないですか(笑)。でも、開けてみると12、1、2、3……という文字が全部複雑な数式で書かれていて、一見、読めないんです。それで「ああ、これはいいな」と思いました。気に入って壁にかけておいたんです。でも結局、針の動きが気になってしまい止めたんです。時計は止めても1日に2回は針が指している時間と合うタイミングがあるので、「あれ、動いてるかも、いや、止まっている」と気になって、針に僕の後ろ姿の写真を貼り付け

て封じました。そういう違和感を察知するというのが制作にとって重要なかもしれません。

### りんごから見えてくる宇宙と残像

**樋泉** 今回の展覧会は1階と2階に会場が分かれていますので、2階の作品のお話も伺っていきます。皆様も《りんごの天体観測》をご覧になったと思います。大きなりんごに小さな穴がたくさん開いていて、それが星に見立てられている作品です(写真1-7)。

**鈴木** 《りんごの天体観測》を最初につくったのは2006年です。まず、りんご一つひとつに宇宙があるということに共感したというか。無限に広がる空間の中で、人類は星の配列に名前をつけて、それはほぼ変わらないものだから、「星座」として、時計のように位置づけたんだと思うんです。そこに物語を見立てるといふか、おのずと発見されてきたと思うんですね。神話もそうですけれども、人の心の中の世界にある、現実の物理的な世界とは違うある種の真実みたいなものだと思うんです。りんご一つひとつにも個別の宇宙があるということがいいなと思って、りんごを撮影しはじめました(写真1-8)。東京大学の吉田直紀さんという理論宇宙物理学の先生と対談する機会があったのですが、宇宙に見えると言っていました。「この写真が欲しい、中高生への講演会のときに見せたい」とまで言っていただきました。物理的な宇宙の起源を研究している人が、この《りんごの天体観測》を受け入れてくれたことが僕はとても嬉しくて、励まされましたね。今回、それを大きくしまして、できてほやほやなので、自分でも何が何だかわかりません。とにかく、黒いりんごという恐ろしいものをつくったぞ、という感じですかね。今はまだわかりませんが、これから発展していくと思います。

何を見せたいかという、ひとつは「残像」です。そこから発せられる「光」です。誰もが小学生か中学生の頃、「自分が今見ている星の光というのは、すでにない星のものかも知れない」というようなことを言われて「えっ、どういうこと」と思いませんでしたか。例えば今ここに見えているペットボトルも、あと30分後には、皆さんが帰られて、さっと消えてなくなります。「光」なわけです。「もの」としてペットボトルがあることと、



写真1-7 《りんごの天体観測》2006/2019年 撮影:今井智己

「光」として今そこにペットボトルが見えているということを考えたいなと思って、「残像」として星を浮かび上がらせるということをしました。

残像というのは不思議なものですが、みんな普段から残像で世の中を見て生きていると思うんです。「触る」というのは、「見える」と「ある」とをつなげるために欠かせない行為で、見ることと触ることをたまたま連結させて、ほっとしたり、不安に思ったり、わくわくしたりするんだと思っています。

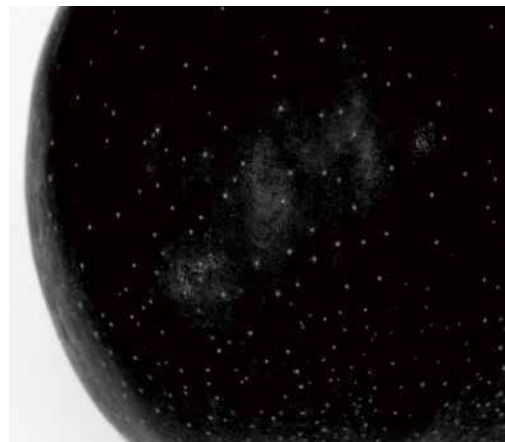


写真1-8 《りんごの天体観測》 2006/2014年

### いろいろな視点から捉える

**樋泉** 今回は、過去に制作された作品の中にも、タイトルを変更したり、展覧会のコンセプトの中で新たに意味づけられているものがあります。例えば、《まばたきの葉》は鈴木さんの代表作ですが、木の葉の形の紙に目の絵が描いてあって、それを木の幹を模した装置に入れると風で吹き上げられ、回転しながら落ちてくるときにばらばらとまばたきをしているように見える、という作品ですね(写真1-9)。この作品も、今回の「雪」というテーマの中で、今までと違った視点で見ることができるといいます。この作品のキャプションには雪景色のスケッチを描いていただいたのですが、過去の作品を新たな文脈で見せていくというのは、新鮮なことではないでしょうか(写真1-10)。

**鈴木** 《まばたきの葉》は、今年で樹齢16年になります。見えない「年輪」が確実に広がっていて、例えば、2004年に観た子どもたちは、15年経ったので、もう成人していますよね。もし覚えていたら、どこかで見て「あのときの作品だ」と思ったり、もしかしたら札幌に引越して、ここで再会する人もいられるかもしれません。



写真1-9 《まばたきの葉》2003年 撮影:市川勝弘  
写真提供:スパイラル株式会社 ワールドアートセンター



写真1-10 《まばたきの葉》のためのスケッチ

最近、そういう風に人と共に年輪を重ねていく作品なんだなと思っているのと、今回、本当にありがたいことに、札幌という地で展示の機会をいただき、「雪に見える」ということにつながったんです。

この作品を2003年に発表したとき、葉っぱに色をつけたいとよく言われました。根拠はなかったのですが「色をつけるつもりはない」とはっきり言っていました。やっぱり、白の光と陰のコントラストがきれいなんです。僕の大先輩に岩井俊雄さんというメディアアートの第一人者がいます。岩井さんは色をよく使う方で、岩井さんから色をつけるというのではないかと、光を当てるといいのではないかとアドバイスをいただいたことがありました。ですがそれでもよくわかりませんでした。その岩井さんが、アルス・エレクトロニカ・フェスティバルのカンファレンスに招待されて海外に行かれたとき、アシスタントをしていた僕の作品を紹介してくれたんですが、お客さんの中に韓国人の女性がいて、僕の作品について質問してくれたそうなんです。韓国語で「雪」と「目」のことを「눈」と言うらしく、「作者はそのふたつが同じ言葉であることを知っているんですか」という質問でした。岩井さんは、僕があまり知識のない人間であることをよく知っているから「彼は知らないと思います」と答えておいたよと話してくれました。実際、僕は知りませんでした。言語の奥にあるものごとのつながりが垣間見えたようで、とても興味深く思いました。

僕の中では、「いろんなものに見える」というのは**いちばん大事なことで**、実は、これは葉っぱにしようと思って葉っぱにしたわけではないんです。渋谷駅で前に並んでいた人が切符を落としたんですが、ポケットから手を出したときに、ポケットの中の切符と手が摩擦

# 鈴木康広 アーティストトーク②

# Yasuhiro Suzuki Artist talk 2

**日時** 2019年9月16日(月・祝) 14:00~15:00  
**会場** 札幌市図書・情報館1階ラウンジ  
**出演** 鈴木康広(アーティスト)  
**聞き手** 樋泉綾子(札幌文化芸術交流センター SCARTS キュレーター)

## 目に見えない「空気」の存在

**樋泉** それではアーティストトークを始めます。本日の聞き手を務めさせていただきます、札幌文化芸術交流センター SCARTSの樋泉と申します。今日は展覧会最終日で、鈴木康広さんにお越しいただいています。

**鈴木** 皆さんこんにちは、鈴木康広です。

**樋泉** 鈴木さんの作品をご覧になって、皆さんそれぞれいろいろなことにお感じになられたかと思いますが、これからの1時間、具体的な作品にふれながら展示を振り返っていきたいと思います。まず、今回は《空気の人》という全長18mの大きな作品を出品いただきました。

**鈴木** 《空気の人》を展示するとその周りを通っていく人が気になります。この施設では、みんなそれぞれいろいろな目的を持って歩いているから、すたすたすた一つと行っちゃうわけですよ。作者としては「何で見てくれないだろう」と思うところかも知れませんが、「なるほど、そうだよ、そんなに急いでるしね」とか、「この人には存在しないことになってんだな」とか、ふたり一緒に歩いていると、ひとり気がついて「あ!」となっているんだけど、もうひとりは何事もなかったように歩いて行くとか。「見ている人の中でどんな風に見えるのか、どんな風に感じられているのか」ということを見る、最近はそのような作品になっています。作品の素材としてはビニールを使っていますが、パントマイムみたいに

「ここに空気の人があります」みたいにするといのかなとも思うんですけど、そうすると逆にみんなが見てしまう。形のないものに対して、どういうふうに形を与えたいのか、ということを考えているんです。「空気」というのは「もの」としてそこに本当にあるんですね。みんな風船に子どもの頃から慣れ親しんでいるから、空気を入れたら膨らむ、ということが当たり前になっていますが、落ち着いて考えてみると、何も目に見えないものを吹き込んでいます。例えば風のように「勢い」があれば膨らむって感じがしますよね。でも、ものすごくゆっくり空気を入れたとしても、膨らむんですよ。てことは、やっぱりそこに「ある」んですよ、ちゃんと。空気の中の分子が、物体としてあるんだってということがそこでわかってくる。この作品をつくって膨らませながら、「不思議だなあ」って始めて思いました。

**樋泉** 展示のときに徐々に膨らんでいく様子を見る



会場の様子

とを具現化して感じさせてくれるのが作品なんです。少なくとも、僕はそういう経験から、風の知らせとか、雪の知らせとか、マバタの知らせとか、いろんな「知らせ」をキャッチして今まで活動して来られたので、そういう根拠のないつながりがとても響きます。やはり、モエレ沼の斜面を下って泣いたことも、こうしてつながったのだとありがたく思っています。

大学生のときは、アートというものについて、特別な才能を持った人が考え抜いてすごいものをつくっている、というイメージがありました。自分は到底そうはなれないけれど、作品を具現化していくことによって、知ることのできなかったことも後から発見していけるというか、見つかってきてしまう。それによって19年くらい特殊な体験をしてきた結果、だんだんと「作家」になってきた、という感じがしています。作家は生まれた作品の後に続いていく存在だと思っています。

半分以上は自然現象から学ぶことが多くて、《まばたきの葉》は、電動ファンの風で垂直に吹き上げて、あとは自然任せです。こうなるから仕方がない、みたいなところで、作者も含めて観客は「ああ、時間がゆっくり流れているな」とか「思ったよりも遠くまで飛ぶんだな」とその続きを見つけるわけです。なので、全部自分でなし遂げようと思わなかったから、未熟な人間としても活動して来られたんだと思います。アートに限らず、そういった視点でものごとを捉えていきたいと思っています。《まばたきの葉》は、お手本といえますか、先生みたいなものですね。

**樋泉** 今、「風の知らせ」とか「雪の知らせ」という言葉を使っていたいただきましたが、「自分で」何かをなし遂げようとするのではなく、向こうからやってくることに自分を乗せて作品をつくり、それをまた新たな見方に乗せていくという、鈴木さんの制作の姿勢がよくわかるお話だと思いました。今回の展覧会は、「雪の消息」というタイトルをつけていますが、消息にも「知らせ」という意味があって、展覧会のタイトルは「note」という英訳をしているのですけれども、そのタイトルの話が今のお話とすごくつながって、腑に落ちた感じがあります。

**鈴木** 何となくつながりましたね。

**樋泉** それでは、今日のお話はここまでにしたと思います。鈴木さん、ありがとうございました。

と一緒にポンと出たんですね。それがくるくるきれいに回っていて、「紙はこんなにきれいに回るんだ!」と思ったんです。すぐ研究室に戻ってやってみたら、よく回りました。でも何もしないのもどうかなと思って最初につくった形が葉っぱだったんです。葉っぱの形にしたら軸が決まりやすくなるのか、必ず回るんです。たぶん宇宙空間の天体もそんな感じだと思うのですが、偏りの中にも均衡がとれたときに、くるくと回転が始まるんです。

## 自然とうまれるつながり

**鈴木** 言葉というのは、多くの人に使われ、長い時間をかけて造形されたものです。イスラエル出身のアーティストにこの作品の話をしていたとき、僕は「まばたき」と何度も発音していて、彼にはどういう意味かわからなかったと思いますが、ヘブライ語で「マバタ」という言葉に「見る」という意味があると教えてくれたんですね。しかも、「瞬間的に見る」「ちらっと見る」という意味らしいんです。「ちらっと見る」というニュアンスまで通じていることが素晴らしいと思いました。

「マバタ」という言葉でつながったのですが、日本とイスラエルは地理的にはとても遠いですよ。でもその2週間後、何とイスラエルからキュレーターが来たんです。これを何の知らせと言うのでしょうか。雪の知らせかもしれないですね。中谷宇吉郎さんがおっしゃる「手紙」みたいなものに近いのかなと思って、僕はとても不思議でした。どうして来られたのか尋ねたら、ニューヨークのMoMA PS1というスペースで僕の別の作品を展示していたのですが、それをイスラエル美術館に出品してほしいという依頼だったんです。そこで、「マバタ」という言葉が「見る」という意味だというのは本当かと尋ねたら、そうだとすることで、《まばたきの葉》を展示することになったのです。

結局、そういう不思議なことがあって、地球というのは、広いようでいて、回転しているから、さっきまで私たちがいたところに違う国の人に来るわけです。勝手な想像ですが、人が吐いた息もそこに残っていて、つながってしまっているのではないかと、僕は静岡県のあるポイントで生まれたけれども、実は別の場所とつながってしまっているのではないかと、そういうこ

のも面白かったです。当たり前ですが、最初はべちゃんこなんですよ。浮き輪の空気を抜いたような状態のものを広げて空気を入れていくと、徐々に人の形が現れる。何もなかったところに存在が立ち現れてくるというのが、見ていて面白かったのと、この作品が現れたとき、珍しがって写真を撮ったりする方も多かったんですが、慣れっこになった方は気にせず通過していく、それもまた面白いなと思っていました。目に見えない「空気」というものを形にすることによってその存在を示す作品ですが、それがまた慣れると見えなくなっていくというのが、「空気」という存在を表している感じがしました。

**鈴木** 撤去して何事もなかったようになって、でも「そういえばここにあったな」と思い出したり、作品を見たあと、その場を立ち去って、家に帰ったあとに、頭の中に浮かぶボリューム感とか印象、反射した光や映像というものが《空気の人》なのかな、と思ったこともあって。「作品」そのものを見ている時間が「鑑賞」だったり「作品を観る」ということだと思いついていたんですけど、自分が見ていたものが見えなくなったあとに思い出すイメージの方に意味があるのかなと考えるきっかけにもなったんです。



写真2-1 《水の人》2019年 撮影・鈴木康広

あとは、今回のテーマにどうつながっているかわからないですが、「水」や「空気」というものは、「公共」という言い方が相応しいのかわからないですが、誰のものでもないもので、人間の体を行き来していたり、「境界」のない素材なんですよ。空気をバルーンに入れはじめたときは、外側の空気をどんどんこの人が「所有」していく感じがするんです。でもパンパンになると、今度は安定状態になって、内側と外側をあまり意識しなくなるんですね。膨らませていくときは移動しているのでそれを感じるんだとか、自分の感じ方を手掛かりにして、ものごとの捉え方を再確認しています。

### 時間と共に変化していく人の形

**樋泉** 今回《空気の人》から展覧会が始まり、「冬」、「雪」というオーダーにお応えいただいて、この展覧会のために《水の人》という新作を制作していただいています。

**鈴木** そうですね。まずは札幌に来て、「水」を氷点下の状態で展示するということができるのかなと思っただけです。今までの作品にも水の波紋を木の年輪に見立てることで「水」そのものを見る《水の切株》や、2017年に箱根の彫刻の森美術館で制作した空気の中の水を結露させる作品などがありますが、「空気の中の水」といういちばんローカルな水のあり方を捉え直す中で、ようやく「氷」という氷点下の状態にたどり着けたところなんです。あとは人の形、自分の体というものが、最も身近にあるものということで、作品の形は僕自身の輪郭なんですよ。《まばたきの葉》に描かれた目も僕が目だったりします。自分自身をモチーフにするということが、いちばん特別な意味を持たないのかなと僕は考えています。

**樋泉** 実際に写真からトレースしてご自分の輪郭をとっているんですか。

**鈴木** 自分の体の輪郭を採取して、それをもとに何度も線を引き直していくんですが、自分の輪郭を残しつつ、人の形というものに向き合うんですね。スタートは自分でつくった線ではあるんですけど、その輪郭が溶けて自然に帰っていく、水に戻っていくというところがいちばんのポイントでした(写真2-1)。

《水の人》は、どんどん痩せていくとか輪郭を変えていくんですが、その形の中に、かつてさまざまな彫刻家が見つけてきた形が見えてきたような気がしました。例えば、ヘンリー・ムーアのつくったほつべたとか肩のラインとか、そういうものが見えてきた感じがあって。さまざまな芸術家が、そこにあるべき形とか、目に見えないものに与えた輪郭が、自然現象の中に見えてきたということに喜びがあって。人によっては、美術家というのはもっとそこに踏み込んで、自分の形をつくるべきだという考えを持っている人もいるかも知れませんが、僕にとっては水平に低く低く向かい地球にへばりついていく、水の形みたいなものがベースにあります。

**樋泉** 皆さんも訪れた時間や個体ごとに違う姿が見えていると思うんですけど、やっぱり人の形をしているから見てしまう、ということがあったなと思います。氷というのは特別なものではなく、自分の家の冷凍庫にもいくらでもあるものですが、先日あらためて作品を見たときに、人の形がまっすぐこちらを向いて、私を見ているという感じがして、相手は氷だけど「意思」がある、だから向かい合わざるを得ない、というようなことを思っただけです。そこが人の形の特別なんじゃないかと思うんです。

鈴木さんの今のお話をお聞きしていると、「個性を出す」ということではなくて、「普遍的な人の形」というところに関心があるのかなと思いました。《空気の人》も《鍵の人》も人の形をしていて、いちばん自分に身近なものとしてそれを捉えているんですね。例えばジャコモメッティや、さっきお話に出たムーアにはデフォルメがあると思いますが、鈴木さんの作品はシンプルな形で、普遍的なものとして開いていくということが特徴なのかなと思いました。

**鈴木** ロダンやムーアなど、現代にはさまざまな作品がすでに残されていますよね。そうした作品とどう関わっていけばいいかということが僕にはわからずじまいでした。美大でも誰も直接的には教えてくれなかった。自分でムーアの形ってこういうところから来たのかな、とか、過去の人が残したものをどう見るかということ、彫刻とはどういうものなのかを探っていく、始まりの地点にいるのかなと思います。あとは、水や空気というものを扱った形に残らない彫刻表現について、

自分なりに考えはじめたという段階ですね。なので、それが彫刻や美術の文脈や「ルール」に則ってということではなく、生活しているひとりの人間としての初歩的なところとして、素材に「自分の輪郭」を与えるようなところからスタートしました。

**樋泉** 生活しているひとりの人間としての等身大の感覚のようなものを、鈴木さんは作品に反映されていますね。扱っているものの形やモチーフそのものが身近でシンプルなので、多くの人に受け入れられるのだらうと感じています。今日トークにお越しになっている皆さんの顔ぶれを見ていても、いつも美術のイベントでお会いする方々とは違う層だなということを感じて、鈴木さんの作品の裾野の広さを改めて感じていました。

**鈴木** 僕は美大を卒業した頃から絵画・彫刻によく興味を持ち始めて、自分でいろいろなものを見て、読んで、人から話を聞いたりして、「ああそういうことなんだ、セザンヌってすごいな」って、30歳ぐらいで感動したわけですよ。そこから徐々に、自分で興味を深めていきました。そうすると専門的な教育を受けたかどうかに関係なく、「それってこういうことだったんだ」という発見が生まれる。何かを面白いと思う適齢期は人それぞれ違っているのに、今は多くのことが学校教育によって均一化してしまっているんですが、「あの頃は興味が持てなかったけど、35歳になってからはまっちゃった」みたいなことって実際には多いんじゃないかと。それを僕は20代以降、自分のペースでリズムを探ってきました。

### 日常の風景に溶け込んでいる「時間」

**樋泉** 次の作品のお話もお聞きしてみようか。《水の人》と一緒に展示している《鍵の人》と《記憶の鍵／スコップ》、こちらも雪をモチーフにした作品です(写真2-2、2-3)。

**鈴木** そうですね。以前《遊具の透視法》という作品をつくったときは、僕にとって公に発表した最初の作品だったので、自分がこれから何をやっていくのかというビジョンは特になかったんですよ。でも作品を観た人が僕に教えてくれるということがありました。それは、「記憶の鍵」を開けてしまう作品だと言われたこ





写真2-2 《鍵の人》2019年 撮影:青木遥香

雪の中に立っているスコップの印象がなぜか頭の中であって、鍵が挿さっているみたいだなと思って。その下に何があるかは見えないということがポイントかなと思っています。スコップが埋もれていく「時間」みたいなものを見せられたらと思ってつくりました。最初スコップは丸見えだったんですけど、今日ひさびさに札幌に来て見てみたら、完全に埋もれていて、時間の経過を感じられました。

**樋泉** 会期中に刻々と姿を変えて

いった作品でしたね。降り積もった雪がすべてを隠して見えなくしてしまうことを、記憶が心の奥底に沈んで思い出せなくなっていくことのメタファーとして扱っていると思うんですが、埋もれてしまったものを掘り起こすのがスコップであり鍵であるはずなのに、スコップ自体が埋もれてしまっていますよね。《鍵の人》もそうですが、今は霜で雪だるまのようにになっていて、鍵を挿すところ自体が覆われていくという……。

**鈴木** そうですね。鍵と鍵穴というのははじめからペアとしてつくられるものですが、これがずっと凍って埋もれていったときに、鍵穴がどんな形だったかということをつくれた僕ですら忘れてしまうんじゃないかと思えてきて。引き出しにも同じ作用がありますが、知っていても見えなければ忘れていくっていう経験はみんなあると思うんですね。例えば日常の中で何かを新聞紙で1年に1回どんどん包み込んでいったとすると、「あれ、中に何があったのかわからなくなっちゃった」みたいなことがあるかも知れないなって。空気中の、あるかないのかわからない「水」を使って、記憶を包んでみたくなったんです。

**樋泉** 埋まってもいい、もう記憶にアクセスできなくてもいいという気持ちがあるんですか？

**鈴木** 日常とはそういうものだと思います。たまに何かの拍子で取っ手の部分がちらっと見えて、それを握る、みたいな。コントロールできないものだと思います。今回素材としては銅を使っています。皆さんも熱伝導率についてご存じだと思うんですが、銅というのは瞬時に熱が伝わるんです。このスコップ



写真2-3 《記憶の鍵/スコップ》2019年 撮影:今井智己

を持って氷に挿すと、スッと挿さるんですね。氷を溶かすパワーがあるんです。そういう体験によって始めて伝わることもあると思うので、いつか体験型の作品として実現できたらいいなと思っています。《鍵の人》も、今は台に設置していますが、札幌に来て、雪の上にこの《鍵の人》を垂直に挿してみたいと思いました。僕の体温で温めた《鍵の人》を雪の上に置くと、スッと挿さっていくはずなんです。展覧会というのは印象的な場をつくるという意味では有効なんです。なかなかそういう体験を再現できないもどかしさがあります。

**樋泉** 札幌に住んでいる人は冬に雪かきをするので、雪山にスコップが立てられているというのは日常生活の中で目にするシーンだと思うんですが、《記憶の鍵/スコップ》では、私たちの日常が、詩的な、物語を感じさせる小さな世界として表されていて、今回の展覧会の中でも特に好きな作品でした。

### 記憶と映像

**樋泉** さて、2階の展示についても伺っていきます。こちらは2階の展示室の入口にある《窓の透視法》という作品です(写真2-4)。

**鈴木** この窓は、僕が2002年以降活動している東京大学の研究所の窓で、とても身近にあるものです。「窓」というモチーフはずっと僕の中であって、今回制作のスタートを切ろうと思ってレプリカをつくりました。窓から見える映像は、僕が2019年に札幌に来た最初の日の、快速エアポート札幌行き車の車窓から撮影したものです。

**樋泉** そうだったんですね。

**鈴木** すぐ忘れてしまうんですね。夏になると冬のことをもう覚えていないんです。

**樋泉** そうなんです。この展覧会も夏の開催なんです。私たちが忘れてしまっている冬のことや、過ぎ去った昔のこと、今日の前にないもの、そのことを鈴木さんの作品を通して思い出すような時間をつくられたらと思って企画しました。



写真2-4 《窓の透視法》2019年 撮影:今井智己

**鈴木** 夏にまで冬のことを思い出したくないっていう人もいるかも知れないんですが、同じ場所なのに夏に冬のことを思い出さないっていうのも面白いと思うんです。そういう、人の「忘れる」という現実や、「思い出す」とはどういうことなのかを、2001年に発表した《遊具の透視法》という作品を通して考えはじめました(写真2-5)。

映像の根源は「人の記憶」そのものであり、「夢」その



写真2-5 《遊具の透視法》2001/2019年 撮影:今井智己

ものなんです。記録技術や再生技術というのは、純粋な映像というものが頭の中であって、それを「再現したい」という人間の欲望があって実現したわけですよ。その延長上にさまざまなメディア技術が生まれたんですが、その中でも僕は特に仮想の領域が重要だと考えており、残像現象に着目しました。「残像」というのは、正直何を見ているかわからない状態なんです。あと「透明」というのもそうなんです。透明なビニールとか。「透けている」というのは実はとても不確かなことで、京都国立近代美術館で、目の見えない人に作品を体験してもらうという企画があったんですが、目の見えない人に《空気の人》を触ってもらったとき、「透明」であることを説明できなかったんです。「透けて見える」ということが、見えない人にはわからない。人が見ようとしていることはとても不確かで、見えることに慣れすぎていて、「見えていても見えていないことがある」ということに気づかないでいるんじゃないかなって。その危うくあいまいなものへの着目を残像現象が奮い立たせてくれました。樋泉さんが前におっしゃっていた言葉は何でしたっけ、《氷の人》が……。

**樋泉** 「見らさる」とか「見ささる」の話ですね。北海道の人は、自分の積極的な意志からではなく、つい見えてしまう、というような状態をそういう風に言うんです。

**鈴木** 自分が「見ている」のではなく、「見させられている」ということでよね。僕はそれをはじめて聞きました。

確かに、例えば広告の仕事をしている人はその状態を意図的につくるわけですね。「見ささる」っていう状態を。目的を果たすために方法としてそれを使うのは当然ありだと思うんです。僕は広告としてやっているわけではないですが、でも、作品をつくるうえで「もうちょっとそこにてほしいなあ」という気持ちは強いんです。だから「見ささる」状態にはすごく興味があります。ただ「見ささる」ってというのは実は見るほうの問題ですよ。見る側がそう感じるということなので、例えば子どもたちによく見てもらえるように意図してやっても全然見てくれない、みたいなのはあると思うんですよね。それで言うと、「残像」というのはよくわからないものだから、人は見えてしまうんです。僕はそういう状態を探してるのかなと思ったんです。「見る／見ら

れる」という区別ができないうえでの「見る」という状況に敏感に反応しながら活動してきたように思っています。

**樋泉** 《遊具の透視法》は確かに「見ささる」作品なんですよね。線で球体をつくっているので、隙間があって、それをクルクル回してできる残像がスクリーンになって、映像が映るという。

**鈴木** この作品は、もともとは実際の「グローブジャングル」という遊具を使ったプロジェクトでした。みんなそれぞれに遊んだ記憶や思い出がある、馴染み深い遊具ですよ。2001年に、NHK BSの「デジタル・スタジアム」という番組に応募して紹介され、公共の放送を通して発表する機会を得たんです。遊具そのものが減っていく中で、そこに映し出された映像は「永遠の風景」というか、いつの時代も子どもたちがそこにいて、それが50年前だろうと100年前だろうと変わらないんじゃないかって思えるような映像だと、いろいろな人に言われました。いつ見ても自分の子ども時代のように見えてしまう、そういう理想的なテーマがあったんだ。僕はたまたまその遊具を目の前にして、「残像で映るんじゃないか、何を投影しよう」って思ったときに、「そのものを映せばいいのでは?」と思えたのが、自分の中では飛躍でした。当たり前のように、なかなかそのものを映すという発想にはならないんです。「あそこで遊んでいる子どもたちは一体誰なんだ」とか、意味が発生するわけですよ。でもそこには普遍性のようなものが宿っていることに当時はなかなか気づけなかった。子どもたちが集まるということは、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんがみんなついてくる、ということなんです。「家族」というのは共有できる、限られた時間の中で一体となって、記憶が具現化したもうひとつの体みたいなもの。親子は似ていたりするわけですよ。おばあちゃんが見たら、「小さい頃のあなたが遊んでいるように見えるよ」となる。そういう、個別と普遍が同居していく感じを、この作品を通してつかめたのが大きかったと思います。

**樋泉** 見る人の記憶もやはりさまざまだと思うんです。遊具で遊んでいる子どもに自分を投影する人もいるでしょうし、さきほどおっしゃったように自分の子どもや孫の姿を見る、あるいは誰のことも見られないと

いうこともあると思います。私なんかは小さい頃そんなに友達がいなかったので、あまりこうやって遊んだことないな、なんて思ってしまうんですね。とてもノスタルジックで、この「幻」のような感じをいつまでも見つめていられる一方、暗い部屋の中にぼかんと浮かんでいる丸い光は、手で触ることもできず、「過ぎ去ってしまったこと」という感じが強くあって、「もうあそこには行けないんだな」という、さみしい気持ちも感じました。

**鈴木** そうですね。過去の楽しかった頃の映像というのは、見たいという気持ちがある一方、見えてしまったときに、喪失感とかさみしさがより生まれてしまう、そういうことは映像メディア全般に横たわっているテーマだと思います。でも、それを見ることによって心に動きが生まれたらいいと思います。例えば思い出したことが嫌なことだったとしても、自分が今それを思い出したということが、生きていくために何かそこから得られるものがあるかもしれません。ふと思いで自然にキャッチできること自体ありがたいことなんじゃないかなと僕は思っています。

## りんごは宇宙

**樋泉** ここから、本展のための新作のひとつ《りんごの天体観測》のお話もお聞きしていきたいです。もともと《りんごの天体観測》は小さな作品でしたが、今回は大きなりんごで空間を構成していただきました。作品の発想の経緯を伺ってもよいですか。

**鈴木** 「りんご」は人類の歴史の中でさまざまな意味を持った果実ですよ。まずはやっぱりその形が面白い。表面には点々と斑点のようなものがあって、それが僕には星々が広がる「宇宙」に見えてしまったんです。この写真もほとんど加工していないんです。モノクロに変換して、コントラストを上げていくくらいで、もちろん、点を足したりはしていないんです。身近なあらゆるものが宇宙の一部であるという、本当に当たり前のことなんです。例えば「この紙コップも、宇宙だよ」と偉大な詩人がいうと「そうですね」ってみんなその世界観に近づこうとするかも知れませんが、たぶん僕がそれを言ったところで「ん?」って感じですよ

ね。詩人のように独自の世界の見方を言葉で表せる人ですら、「私にそう見えるのではなくて、世界がそうなっているんだよ」ということを、自分の存在を消しても伝えたい、というところがあるんじゃないかと僕は思っています。数あるものの中でも、りんごは「りんごがそうなってるんだから仕方ない」と思えるモチーフではないかと思うんです。

**樋泉** 映像の中でりんごがアップで映っているときに、お客様をご案内して「何に見えますか」と聞いてみると、皆さんりんごだとわからなくて、「宇宙?」みたいな感じなんです。引きの映像になって「あ、りんごか!」って気がつくんですね。身近なものでも、私たちはあまりよく見ていない。

**鈴木** そうなんです。僕はもう2006年頃にこのことに気づいてしまったので、もう13年も「りんごは宇宙である」と思っています。最初に気がついたのは2004年か2005年頃のことですが、2006年頃、ちょうど《りんごの天体観測》の制作をしているとき、夜の帰り道で、東京なのにすごく星が見えて、「ほんとにりんごだ!」と思って、鳥肌が立ったんです。興奮して眠れませんでした。「りんごと宇宙はほんとにひとつだな」って思ったことをまだ覚えてるんですよ。13年も経つとそれが当たり前になってしまいましたが。

**樋泉** はじめて知るとやっぱり驚きます。今日来ている皆さんにとってはもう「りんごと言えば宇宙」ということになりですね。

**鈴木** それがいいことかはわからないですよ。例えば、桜の散るのを見たり、落ち葉の季節になると《まばたきの葉》を思い出すと何度も言われたことがあるんです。「あれ、これってちょっとよくないんじゃないかな」と思って。でも、現代にもう一度気づく必要があったとしたら、その方がより自然との交感、新鮮な交流が生まれるということなのかなとか。日常の中で作品を想起させることについて、個人的には悩んだ時期もありましたね。

## 人間と植物との関係を表現

**樋泉** 《まばたきの葉》のお話が出たので、この作品についても伺いましょうか。

**鈴木** 《まばたきの葉》は2004年、僕が25歳くらいの

ときにつくった作品ですが、その後、僕が見つけていくべきものを先取りして生まれたプロトタイプだと思っています。「未来にこんなものがあつたらいいな」というテーマで若いクリエイターが発表するチャンスがあつて、そのときは最新のメディア技術による構想を提案する場面だったんですね。僕だけ空気が読めずに、「植物はすごい、ハンパない」「人間なんて後から地球に來た存在で、植物のほうが大先輩だ」とか言つて、葉っぱに着目していたんです。人間がこの先ずっと地球上に生き延びたとすると、植物も人間のことを無視できなくなつて、人間と交流しはじめる。対話を始めるんです。例えば、木がそこを通りかかる人のことを覚えるんですね。「あ、樋泉さんだ。今日もお疲れさまです」みたいな。それで、秋になると樋泉さんの目の模様を葉っぱに浮かばせるんです。それで、散つたときに樋泉さんが「あ、私の目だ!」となる……というプレゼンをしたのですが、みんなぼかーんとしてしまつて。

それでやっぱり実物が必要だと思つて、準備して持つて行つたんですね。紙筒に100円ショップで買ったラーメンの器みたいなのを貫通させて、中に扇風機のようなファンを入れて、紙の葉を吹き上げてプレゼンしました。それがきっかけで生まれたのがこの作品なんです。人間と植物あるいは自然現象がつながつていくイメージや構想を具現化するようなものだと思つています。その後、空間性、実体性、参加性といった観点から、メディア芸術の研究のひとつのプロトタイプとしても歓迎されて、いろいろな文脈で活動の居場所をもらえたんです。メディア技術は、世の中を便利にするだけでなく、今あたりまえになつてしまつているものに、もう一度気づかせてくれる作用があるんですね。

今回は「雪」というテーマがあつて、葉っぱが雪に見えるという人もいます。上から白いものが降ってくれば雪という発想はあると思うんですが、僕らが思つている以上に、捉え方はまだまだあるのかなと思つています。空気の捉え方も科学的視点から説明されても、やっぱりまだよくわからない。あと、これは「目」をモチーフにした作品なので、目の見えない方からもコメントをいただいたことがあるんですが、この作品は見えない人にも見えるんです。葉っぱが降ってくるのがわか

るらしいんですね。

**樋泉** 「音」ということですか？

**鈴木** 音もそうですし、風ですね。さすがにこれだけのものが上から降ってくれば感じるんですね。見えると言つても、違う形で見えていると思うんです。「感じる」というか。そういう「見る」ということの違う側面を表してくれている作品でもあるのかなと思つています。

**樋泉** 今回《まばたきの葉》を夜に撮影した写真があるんですが、夜、街灯の下で雪が降っているとちょうどこんな感じに見えるんです。《まばたきの葉》のところで小さなお子さんが遊んでいる様子を皆さんもご覧になつたと思ついますが、どちらかという明るくてにぎやかなイメージのある作品なんですよ。でも夜に見てみると、どこかさみしげで、遠い雪の日のことを思い出す、というような感じもあつて、今、鈴木さんがおっしゃつたように、いろいろな文脈で見ることができると感じました(写真2-6)。

#### 子どもの意見にただ共感する

**樋泉** 最後に会場からも質問を受けたいと思つています。

**来場者** 中学校で美術の教員をしています。鈴木さんの作品を見ていて、世の中にある情報がまったく



写真2-6 《まばたきの葉》2003年 撮影：今井智己

意味を持たないというか、いろいろなことを知らなくとも感じられる、楽しいと思えるというところに共感しています。そのような感覚が子どもたちにも同じように備わるかということがすごく気になっています。今だと2、3歳の頃からスマホを見ていて、例えば足もとのアリだとか土だとかを見ていない状況があるということ、鈴木さんもお考えになつたことがあるのではないかと思います。子どもの頃にどのような経験や出会いがあると心が豊かになるのかということについて、お考えがあつたらぜひお聞きしたいです。

**鈴木** えーと、難しい質問ですね。どんな時代でもそんなに人は変わらないのかなと、けっこう楽観的に思つたりもします。ただ、大人になるとどうしてもほんのどのことを理解した気分になるので、その気分で子どもに接すると失われてしまうものも多いと思つています。**不思議だと感じたことに対して、説明せずに「ほんとに不思議だね」って一緒に言うのもいいんじゃないか**とか。目の前で起こつたことに対して、一緒にいる親の反応を見て、それがすごいことなのか、普通のことなのか、珍しいことなのかで子どもは一緒に感じていると思うので、もしかしたら親は演じなくちゃいけない部分もあるのかなと。はじめて見たときはすごくびっくりしたけど、さすがに2回目だからびっくりできないなつていう場面でも、今はじめて一緒に見る子がそこにいるのなら、最初の感動を演じるという工夫は必要かもしれないですね。

僕自身がこういう活動をしているのは、いちばん最初の印象的な経験にたくさん出会えたからだと思つています。衝撃的なことが自分の中で多かつた。そんな風に感じやすい性格だったのかもしれないですが、おばあちゃんや周りにいた人たちの反応が面白くて、僕が子どもの視点で「こうなんじゃないか」って言ったことに「きつとそうだよ!」って言ってくれたんです。だから、両親には確認しなかつたんですね。両親は自営業で、スーパーを経営していたんですが、忙しすぎて相手にしてくれなかつたんです。だからおじいちゃんやおばあちゃんがずっと一緒にいて、僕が言ったことに「そう思うよ」「そうかもしれないね」「ほんとに不思議だね」って答えてくれたんですね。あと彼らの先には「自然」があるって感じがしました。学校での勉強があるという感じではなくて、その先は何もなくて、あと

は自然界や砂浜が……という、想像が広がるような、知識ではない世界があつて。子どもの頃から周りが反応してくれたこと以外、手掛かりがなかつたので、自分で考えざるを得ないというか、自分なりに腑に落ちる、自分なりに理解する道筋を見つけるということにこだわりがあつたんです。それが今に至つているんだと思つています。

**樋泉** ありがとうございます。とてもよいお話を聞かせていただきました。それでは、鈴木さん、皆さん、本日はありがとうございました。

#### 樋泉綾子

1978年札幌市生まれ。北海道大学大学院文学研究科修士修了後、札幌市内の廃校を拠点に「あけぼの美術企画」としてアーティストを招いたレクチャーなどを企画。札幌芸術の森美術館、本郷新記念札幌彫刻美術館の学芸員として「空間に生きる—日本のパブリックアート」(札幌芸術の森美術館、札幌、2006年)、「ロダン展」(本郷新記念札幌彫刻美術館、札幌、2016年)など彫刻に関する展覧会のほか、「となりのひと」(同、札幌、2012年)などの現代美術展を担当。2018年より札幌文化芸術交流センター SCARTS キュレーター。